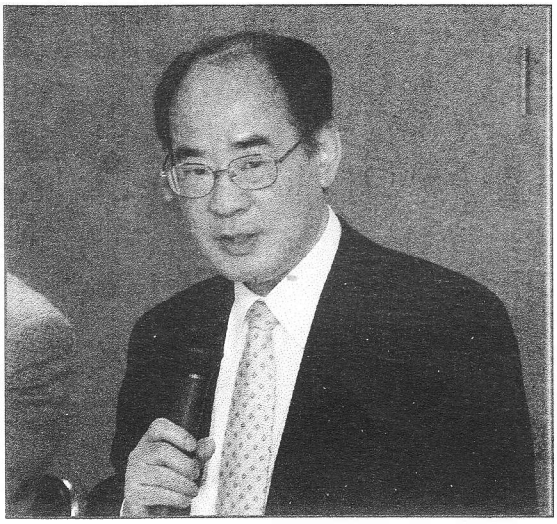
Vol.64-No.01　　2012年5月

阿佐ヶ谷教会

信友会会報

4月例会報告



「使徒言行録の学び」（第1回）　大村　栄 牧師

－新約聖書　使徒言行録　第1章－

2012 年度の信友会例会は聖書研究を中心にし、時に会員の興味ある話題を提供する形で進めます。聖書研究は「使徒言行録」を年間で取り上げ、第一回の今月は第１章を大村栄先生に講演していただきました。

また昼食は、寺嶋章兄によるレンズ豆のスープでした。レンズ豆は西アフリカ原産の薄い円盤形の独特の風味を持つ豆で、ガラスのレンズの名はこの豆の形に似ている所から付けられたと言われているそうです。大変古くから地中海沿岸でも食されていた豆で、旧約聖書の創世記のカインとアベルの時代にすでに食べられていたようです。添えられた３種のドイツパンと一緒に旧約聖書の歴史を感じながら美味しくいただきました。

「聖霊行伝をたどる－使徒言行録の学び」　大村　栄 牧師

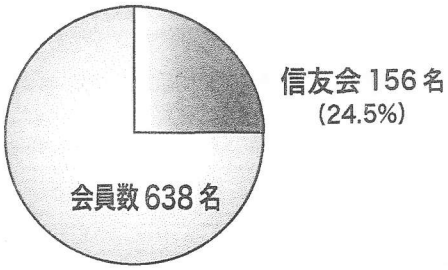
今年度の信友会は、聖書研究を中心に学ぶことにしました。そして初代教会の立ち上げと世界宣教を学ぶため、使徒言行録を取り上げることになりました。聖書研究は、阿佐ヶ谷教会が大事にしてきた伝統であり、今年度は青年・婦人の５部会がすべて聖書研究を行います。

使徒言行録は、ご存知の通りルカが「ルカによる福音書」と共に纏めたものです。前半はキリスト昇天後にエルサレムの教会を建てて行く過程を、後半はパウロによる異邦人伝道と教会の拡大について書かれています。使徒言行録の初代教会の形成を通して現代の教会のあるべき姿を考えることが出来ます。

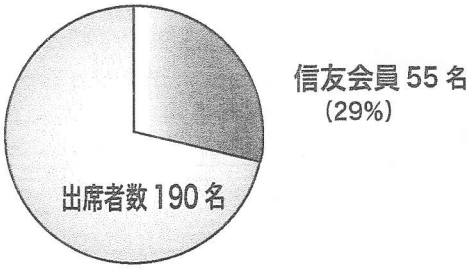
（次ページへ）

◎ 2011 年度データから見る信友会（その１）

現住陪餐会員数と信友会



ある日の礼拝出席者割合



12月4日（2011 年度の平均出席者数に近い日）の場合

（前ページより）

使徒言行録の書かれた年代は、紀元８０年代で「ヨハネによる福音書」と同じ頃だと思われます。「使徒」はギリシャ語で「アポストロス」で「遣わされた者」という意味です。

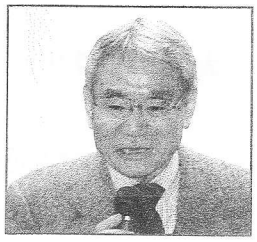
使徒言行録では、ルカ福音書と同じく冒頭に献呈された人物として「テオフィロさま」が出てきます。ギリシャ語で「テオ」は神を、「フィロ」愛でフィロソフィーの語源です。ちょっと出来すぎなので偽名・匿名かもしれませんが、献呈という言葉が使われたことから、ローマの高官でキリスト教に近親感を持つ人ではないかとも推察されます。ルカ福音書でキリストの生涯を、使徒言行録でキリスト教のその後の展開を示し、キリスト教はローマ帝国の形成にとって邪悪なものではない。ローマの平安（PAX ROMANA）を破るものではなく、かえってローマ文化を底支えするものであると進言しています。

「約束の聖霊」

第１章の３節からは、「約束の聖霊」です。ルカ福音書の最後でイエス・キリストの十字架上の死と復活が示されて終わります。使徒言行録はそれに引き続いて、イエスが 40 日間弟子たちと共に過ごし、神の国について話されています。

40 という数字はユダヤ人にとって大切な数字です。先ず、モーセによる出エジプト、カナンへの帰還を目指す荒野の 40 年。これはイスラエルの初めです。次にバプテスマのヨハネからの受洗後サタンの誘惑を受けながらの荒野の 40 日。これはキリストの初めです。そして、ここに書かれている復活後の 40 日は、教会の初めです。

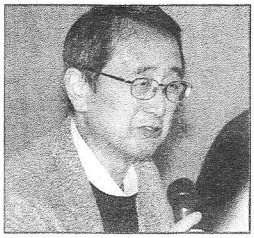
ここで、イエスは、弟子たちにエルサレムを離れずあらかじめ神が約束されたものを待つように指示します。これは、マタイによる福音書の第 28 章 19 節の弟子たちの大派遣、「行って全ての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授けなさい」と少し矛盾しています。使徒言行録では、使徒たちは未熟で不十分であり、派遣の前にすることがあること。ヨハネが行った水による洗礼ではなく、約束の聖霊による洗礼を受けることがまず必要であると言っています。

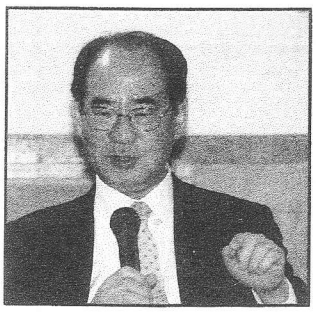


6 節では、弟子たちは、イエスに「イスラエルのために国を立て直して下さるのはこの時ですか」と尋ねます。ここに聖霊を受けていない使徒たちの無理解が３点見られます。（1）「イスラエルのために」。これは我が国民のためにという制限つきの期待です。（2）「立て直して下さる」。イエスさまがやって下さるという依存性が見られます。（3）「この時ですか」。タイミングを人間的な判断で推測しています。

しかしイエスはこの問いをことごとく否定します。（3）の問いに対しては「神がご自分の権威を持って定める時や時期はあなた方の知ったことではない」。時期を決めるのは神が行うことで人間のすることではないというのです。（2）に対しては、「あなた方の上に聖霊が降りると、あなたがたは力を受ける」。あなた方の上に聖霊が下り、あなた方自身が主の証人になるのだと言うのです。そして（1）に対して、「エルサレムばかりではなくユダヤとサマリアの全土で、また地の果てまでわたしの証人になる」と、弟子たちの制限つきの期待をはるかに越えて遣わされるのだと言っています。このように、真の聖霊を受けるまで、彼らは派遣されるには不十分であると言い、これを受けるまでエルサレムを離れないようにと勧めているのです。

イースターの日付は月の満干により変わりますが、今年は４月８日で、イエスの昇天日は 40 日後の５月 17 日（木）になります。イエスの昇天は、目に見えなくなるが「普遍化」すること、あらゆる場所に居られるということです。エルサレムという限定した場所を越えてあらゆる時、あらゆる場所に居られるようになりました。なお、再臨の時はわれわれの想像を越えて神さまが決めることです。





例会での活発な質問、発言とそれらに解答する大村牧師

「マティア選出」

その後弟子たちは、「オリーブ畑」と言う山からエルサレムに戻りました。約1キロの行程であり、その後アパールームと呼ばれる家に集まったのでしょう。2階の部屋が最後の晩餐が行われた場所だと言われています。集まったのは、イスカリオテのユダを除く 11 人の使徒と母マリアや婦人たち、イエスの兄弟たちであったと書いています。イエスには数人の兄弟がおり、その代表的な人物がヤコブです。ヤコブは、エルサレム教会で高い地位にあり、ペトロからエルサレム教会の代表を引き継いでいます。使徒言行録第9章 26 節以下では、イエスの顕現を受けたパウロが生前のイエスを確認するために　エルサレム訪問した時に使徒たち自由に行き来して確認したと書かれています。パウロはこれと少し違って、ガラテヤの信徒への手紙第1章１８節以下で、このときエルサレムに 15 日間滞在しペトロとヤコブのみに会ったと言っています。この有力者であるヤコブがイエスの弟です。

ここで、ペトロが立ってイエスを裏切りユダヤ人に売った「イスカリオテのユダ」について、不正を働いて得た報酬で土地を買ったが、その地面に真っさかさまに落ちてその体は真ん中から裂けたこと。その土地は、「アケルダマ」血の土地と呼ばれたことが語られます。詩編ではダビデの言葉として、「その住まいは荒れ果てよ、そこに住むものはいなくなれ」詩編 69 章 26 節の引用、次の「その勤めは、他の人に引き継がれよ」は詩編 109 編8節の引用です。因みに、このユダについて「マタイによる福音者」では、第 27 章3節以下で、ユダはイエスに有罪の判決が下ったことに後悔し、報酬の銀貨 30 枚を祭司長に返そうとしたが、我々の知ったことではない。お前の問題だと言ってはねつけられたので、銀貨 30 枚を神殿に投げ入れて自殺したと、少し違った形で書かれています。

次にイスカリオテのユダの後任の補充について書かれます。イスラエルにおける 12 と言う数字も大切です。イスラエルの 12 部族などからくる数字です。このためか、使徒たちはすぐにユダの後任の補充を始めました。使徒になる条件は 21 節以下で、いつもイエスと行動を共にした者、つまりイエスがヨハネのバプテスマを受けてから天に昇るまで行動を共にした人で、主の復活の証人になれる資格のある者から選ばれるのです。

使徒たちは、バルサバと呼ばれ、ユストともいうヨセフとマティアの二人を立てて籤引きをします。ユダヤの伝統では、このような選考では籤引きで決めることが多く、旧約聖書には良く出てきます。この籤引きの精神は、人が選ぶのではなく、神が選び、その結果を籤に表すことを意味します。籤引きは、箴言では籤を膝の上に投げると書いてあります。サイコロなのか、判子、六角形の棒に印のついたもの等が考えられます。籤の結果、マティアが選ばれて使徒の仲間に加えられました。

使徒言行録第1章では、弟子たちは復活のイエスと共におり、神の国についての話を聞くなどの教育を受けながら 40 日を過ごしました。イエスの昇天後は、使徒たちはエルサレムを離れず、ユダの後任としてマティアを選任して使徒に加える等体制を整えて、いよいよ第2章の聖霊降臨の時を迎えます。

ここから教会は、神の御心に導かれ進んで行きます。そして使徒言行録は再臨の時まで今も続いているのです。

（文責：玉澤武之）

次回信友会例会は **5月27日**です。ぜひご参加ください。
今回に引き続き大村栄先生による「使徒言行録の学び（第2回）」を予定しています。